

とちぎ発 旧足利日赤跡地の活用

市活性化のモデル事業に

足利市役所の西側。すぐ西側には「日本夜景という同市中心市街遺産」や「恋人の聖地」に認定されながらも、地でありながらも、2011年7月以降、足利織姫神社があることなシャッターが閉まつたままとなっていた。旧足利赤十字病院跡地(同市本城3丁目)を求め、13年に初当選した和泉聡

市長は就任時から、市街地活性化の鍵として、鑢阿寺周辺の基盤整備と同病院跡地の活用を改築し、看護学部の校舎と利用する計画だ。課題は少なくない。残る病棟2棟は取り壊す予定で、無償譲渡とはいえ大きな金銭的な負担を強いられる。周辺のインフラ整備などには、市の支援も不可となろう。

長年、まちづくりに携わってきた池沢昭副市長は「現在あるものに新しい息吹を入れ、元気にしていくのが地方創生」と持論を展開、同大計画をまちづくりの起爆剤として積極的に支援する考えを示す。一方、もうひとつの活性化の鍵となる鑢阿寺周辺整備は、休止されていた大日西地区と中央地区の土地区画整理事業を15年度に再開させることで具体化を図る。市は二つの事業を通して、駅から足利学校、鑢阿寺、同大新キャンパス、足利織姫神社までの動線を整備する構想を描く。当然、構想実現のためには長い年月や多大な予算、地域住民の協力が不可欠となる。市民の理解を得るため、市に丁寧な説明が求められることは言うまでもない。

が足利工業大に無償譲渡され、同大キャンパスとして活用されることになった。街なかに大学生が増えれば、JR足利駅や東武足利市駅とキャンパスを結ぶ通りにぎわい創出にもつながる。病院跡地や周辺の整備が同市中心部活性化のモデル事業となるよう期待したい。

病院跡地の敷地は約8100平方メートルで、8階建てのさくら棟など3棟の病棟が今も残り、最大限の歓迎の姿勢を示すが、偽善の気持ちだろう。同大は3棟のうちさくら棟

10日、同大の牛山泉学長と同病院の小松本悟院長が基本合意の報告のため市役所を訪れた際、和泉市長は「超の付くダントツのビッグニュース。きょうは歴史的な日になる」

と最大限の歓迎の姿勢を示したが、偽善の気持ちだろう。同大は3棟のうちさくら棟

10日、同大の牛山泉学長と同病院の小松本悟院長が基本合意の報告のため市役所を訪れた際、和泉市長は「超の付くダントツのビッグニュース。きょうは歴史的な日になる」